SHINZO MITSUDA

三津田信三

生霊の如き重るもの

講談社文庫

講談社文庫

生霊(いきだま)の如き重(だぶ)るもの

三津田信三

講談社

|著者| 三津田信三　編集者を経て2001年『ホラー作家の棲む家』（講談社ノベルス、『忌館』と改題、講談社文庫）で作家デビュー。2010年『水魑の如き沈むもの』（原書房、講談社文庫）で第10回本格ミステリ大賞受賞。常にホラーとミステリの融合を試みる独自の作風を持ち、ミステリランキング等で注目を集める。近刊に『のぞきめ』（角川書店）、『五骨の刃』（角川ホラー文庫）、『ついてくるもの』（講談社ノベルス）、『幽女の如き怨むもの』（原書房）、『七人の鬼ごっこ』（光文社文庫）がある。
主な作品に『忌館』、『作者不詳』、『蛇棺葬』、『百蛇堂』（講談社文庫）と続く〝作家三部作〟、『厭魅の如き憑くもの』（原書房、講談社文庫）に始まる〝刀城言耶〟シリーズ、『禍家』（光文社文庫、角川ホラー文庫）に始まる〝家〟シリーズ、『十三の呪』（角川ホラー文庫）に始まる〝死相学探偵〟シリーズ等がある。

生霊の如き重るもの
三津田信三
© Shinzo Mitsuda 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年７月15日第１刷発行

発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン―菊地信義
製版――慶昌堂印刷株式会社
印刷――慶昌堂印刷株式会社
製本――加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277859-6

目次

死霊の如き歩くもの……7
天魔の如き跳ぶもの……87
屍蠟の如き滴るもの……177

生霊の如き重るもの……293
顔無の如き攫うもの……449
解説　円堂都司昭……552

●各話扉イラスト　楢喜八
●目次イラスト　村田修
●扉・目次デザイン　坂野公一（welle design）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

講談社文庫

生霊（いきだま）の如き重（だぶ）るもの

三津田信三

講談社

生霊の如き重るもの

目次

死霊の如き歩くもの……7
天魔の如き跳ぶもの……87
屍蠟の如き滴るもの……177

生霊の如き重るもの……293
顔無の如き攫うもの……449
解説　円堂都司昭……552

●各話扉イラスト　楢喜八
●目次イラスト　村田修
●扉・目次デザイン　坂野公一（welle design）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死霊（しりょう）の如き歩くもの

一

「目の前には誰もいないのに、てんてんと処女雪の上に足跡が印されていく……」
薄暗く照明を落とした応接間で、暖炉の炎に照らされた井坂淳則の端正な顔が、とても無気味に見えている。
「トルストイは『怖いものは何ですか』という問いに対して、そういう光景が一番恐怖だと答えています」
「一種の透明怪談ですね」
都林成一郎が合いの手を入れると、
「まぁ幽霊のほとんどが、見えないと言えばそうだからな」
風邪のため鼻声の上沢志郎が、何とも皮肉な物言いをした。
「でも、この場合は姿が見えないにも拘らず、ぽつぽつと足跡だけが印されていく……その眺めが怖いわけです」
思わず刀城言耶も口を開いていた。

「モーパッサン『オルラ』やビアス『妖物』、クーチ『一対の手』やヒチェンズ『魅入られたギルディー教授』など、人間の目には見えない怪異の話は、欧米の怪奇小説にも作例が幾つか見られます。最近読んだ短篇ですが、アイルランド出身のオブライエンが――」

尚も彼が勢い込んで喋っていると、本宮武が笑みを浮かべながらも、やんわりと彼の脱線を窘めた。

「刀城君、あなたの怪奇小説談義は、ちゃんと後でゆっくり拝聴しますから、今は井坂君のお話を聞こうではありませんか」

「あっ……はい。どうもすみません」

そこは都心から離れた郊外とはいえ、度重なる空襲から奇跡的に逃れた本宮家の洋館〈本家〉の応接間である。学生の言耶が、国立世界民族学研究所で教授職を務める本宮武を訪ねたのは、大学の恩師である木村有美夫が紹介してくれたからだ。

「ただし刀城君、本宮先生が仰るには、大晦日から元日に泊まり掛けで来て貰うしかないという話なんだが、どうする？」

もちろん言耶に否はなかった。実家に帰っても父親の牙升とは顔を合わせ辛い。それに何と言っても外国で民俗採訪をしている学者から、現地で体験した生の怪異譚を聞けるのである。こんな貴重な機会を、年越しだからと見過ごすのは余りにも勿体

ない。

アフリカの仮面儀礼の研究で有名な本宮のところには、戦前から戦後に亘って四人の研究者が出入りしていた。これは本宮が後進の育成に積極的であり、本宮家の別邸である〈四つ家〉を彼らのために提供していたからだ。

今、自らの体験談を語ろうとしている井坂淳則は、城南大学の助教授である。専門はパプアニューギニアの狩猟採集民スグショウ族で、主に土着の精霊信仰を研究している。

伊野田藤夫は天谷大学の助教授で、専門はバリ島の神話。四人の中では一番古くから本宮家と付き合いがある。四つ家を最初に利用したのも彼だった。

上沢志郎は井坂と同じく城南大学で助教授の職にある。専門がアフリカの仮面結社なのだが、実は現地での民俗採訪が苦手で、本宮には色々と世話になっているらしい。

都林成一郎は国立世界民族学研究所の助手で、本宮家に出入りしはじめたのは戦後だった。そのため皆の中では新参者になる。

この四人が研究所と本宮家を訪れるのは、武の民族学者としての業績に敬意を払い、且つ彼の人間性を慕っているからだが、それだけではないと言耶はすぐ気付いた。暖炉の右側に座る井坂の正面、彼の向かいに腰掛けた美江子の存在が、この家に

四人を引き寄せていることは、まず間違いない。それは彼らの言動に如実に表れていた。

武の一人娘である美江子は、昨年の春に女子大を卒業して以来、父親の研究所を手伝っている。それまでは相手が学生のため、四人にも遠慮があったのかもしれない。しかし彼女が研究所で働き出したことで、色々と波風が立ちはじめたようである。そんな想像が容易にできるほど、美江子を巡る彼らの間には何とも言えぬ緊張感が漂っていた。

尤も本宮家で四人が顔を揃えるのは年に数度しかなく、一番確実なのが年末年始だという。何箇月も現地で暮らす民族学者だからこそ、せめて正月くらいは故国で過ごしたいのだろう。だから彼らの体験談を聞くつもりなら、この時期を逃す手はなかった。

本宮家には言耶の先輩の阿武隈川烏も同行したがったが、恩師が難色を示した。

「刀城君は自信を持って紹介できるんだが、うーん、君はねぇ……」

言耶も一人の方が有り難かったので、それでも尾いて来ようとする阿武隈川を撒いて、ようやく本宮武を訪ねたのである。

年越し蕎麦をご馳走になり、おまけに風呂まで勧められ、全員がゆったりと応接間で寛いだところで、洋酒を片手に怪異譚の披露となった。最初に本宮、次いで伊野

田、そして今、井坂が語り出していた。

「スグショウの人々は狩猟民族です。彼らは特殊な草根木皮から生成した毒を塗った吹矢により、獲物を仕留めます。もちろん吹矢も手作りで――」

説明を続けながら矢と筒の実物を取り出すと、彼は皆に回した。矢は何か堅い木を削って作られており、筒は中の節を抜いた竹で五十センチほどの長さがある。

「その矢には毒が塗られていませんが、扱いには気を付けて下さい。毒の方は、この瓶の中に入れてあります」

次いで透明な小瓶に入った赤黒い液体状の毒を見せると、同じように全員に披露した。

「狩猟に於いてはとても勇敢な彼らですが、村で誰かが死ぬと、それが病気であれ事故であれ、全て死霊や精霊の所為だと考えます」

「バリでも地下に悪霊が棲んでいて、人間に禍いを齎すと信じられている」

伊野田が口を挟んだ。

「尤も悪霊よりバリの人が恐れるのは、呪術師に呪いを掛けられることだけどな」

「スグショウ族の人の死も、実は呪いと言えなくもないのです。ただし本人にも家族にも、思い当たることが直接ないため、些か厄介でして……」

「どういうことかな？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com